慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ヴント」氏生理的心理学所載の変体精神現象（其二）：第二章 睡眠と夢
Sub Title	
Author	稲垣, 末松
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.5 (1910. 11) ,p.578(78)- 588(88)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101100-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ヴント」氏生理的心理學所載の變體精神現象（其二）

稻垣末松

第二章　睡眠と夢

第一、睡眠の原因並にそれに伴ふ現象

睡眠がどうして起るかといふ生理的原因は今日迄の所では判然分つて居ない。たゞ是が週期的の生活現象卽ち時を定めて起るものであるといふ事だけは確言する事が出來る。さうして此のやうに時を定めて起る生活現象であるから、それが起る最近の源泉は呼吸とか心臟の鼓動とかいふやうな週期的作用と同樣に、中樞の神經系統に於て求めらるべくあるのである。此の外に睡眠の來る一般的條件を調べて見ると次のやうな假定は實らしくなるのである。それは神經系統中に於ける勢力が漸次に消耗して相當の限界に達し疲勞が來るといふと、茲に睡眠をなして筋肉を靜止せしめ體溫を低め、かくて新しい緊張力を發生しせめやうとするといふ事である。併し此のやうな一般的說明では、未だ睡眠に關する充分な理由を擧げたといふ事にはならぬ。その證據には大に疲勞して居つても睡眠の催しのないといふ事もあるし、又この反對に大なる疲勞がなくも睡眠は來る事があるからである。そこで吾人はどうしても第二の心物的條件を求めねばならぬ。それは何であるかといふに注意力の影響といふものである。此の注意力は疲勞に反對して働く事もあれば又それと同樣の效果を及ぼす事もある。この證據には動物といふものは通常の覺官的興奮が拒絕されて注意力の活動が止められると、十中の八九迄は睡眠に陷るのであつて、又人間に於ても知力上の仕事をすることの少いものは容易く睡眠をするのである。さらに又平等一樣に反復さるゝ印象例へば時計のカチ〳〵とか電車内のゴー〳〵とかいふやうなものも、つまる所外界の印象がないと同じやうな影響を及ぼし、かくて睡眠を促すのである。否此等の場合に於ては睡眠の來る事は最も確かなものである。總

て此種の事實によつて見るならば神經系統の疲勞といふ事は單に睡眠を來さしむる一般的條件に過ぎないのであつて、之によつては主として睡眠の續く間の長短とか深淺とかいふものが定められる計りである。從つてそれが來る最近の原因は神經中樞に於ける直接の變化にあると謂はねばならぬ此變化といふものはどういふ時に來るかといふに何時でも注意力が皆無になるか又は減少するかすると來るのである。その外に此のやうな中樞に於ける直接な變化を睡眠の最近の原因と認めると、さらに他の幾多の現象も容易く說明されるのである。それは病的睡眠狀態や又睡眠を來す藥品の效力などの事である。けだし此等の場合に於てはその病氣とか藥品とかゞ先づ中樞を刺激しかくて此の中樞の官能作用に變化を來さしめ、その官能作用に變化を來さしむれば睡眠は必ず來るからである。そこで此のやうな假想的「睡眠中樞」は孰れにあると假定すべくあるかといふに、之はよく分らぬ。併し睡眠が常に催起さるゝ條件に基くと、之は謂ゆる統覺中樞卽ち前頭廻轉其のものであると認むべき事は最も近い說明である。

次に睡眠の結果として顯はれる所の現象に基いて調べて見ると、睡眠中には此中樞からして中樞全體の神經系統を影響する所の效果が波及されるやうである。此の效果の性質といふものは疑もなく甚だ複雜な性質のもので且つ容易く變化する性質のものである。例へば分泌作用とか外界の刺激に應ずる覺官の興奮力とかいふものは減ずるけれども呼吸作用や血管運動作用などに於ては何等の規則正しい變化は起らぬ。通常心臟の鼓動は遲くなり後になつては速くなる。之と同樣に呼吸は往々深く且つ永くなり、之によりて覺醒狀態に於けるよりもよく多く血管運動の神經活動に對して影響を及ぼすのである。通常血管運動作用は寢入りばなの時に於ては非常に甚だしい變動をなすのであつて、之は筋肉の容積が高低するのに徵して判明するのである。又腦髓に於ける血液や溫度の狀態といふものは頭蓋骨に對して圓鋸術を施された人

に於ける觀察に基くと、睡眠の始りに於ては突然に上り、さうしてそれから後の睡眠中には、覺醒、狀態の正常な高さを少し超える計りである。そこで覺醒するといふと反對の變化が起るのである。卽ち血液が逆流するから腦髓の容積は突然に減ずるのである。されど此際に於ても若しも覺醒する時に强烈な感情興奮が伴つて居ると趣は異なるのである。卽ち此の場合に於ては右等の徵候に多少の變化を來さしめるのである。

睡眠の此等の徵候の中で外形的に最も多く顯はれる所のものは覺官的刺激に對する興奮性の減少といふものである。之であるから此の減少の度の多い少いといふ事は睡眠の深淺に關する直接の標準となるのである。卽ち覺醒を促すのに要せられる刺激をば、かの刺激國の例に倣つて覺醒閾と稱するならば、此の覺醒閾の强弱は睡眠の深淺に逆比例をなすのである。覺醒閾の强弱に關し行はれた實驗によると、睡眠といふものは寢入りの後直ちに最大の深さに達する。されど此の深さに於て暫時續き、さうして此後は、數時間續く所の輕い睡眠となりかくで覺醒に移り行くのである。睡眠中には多くの場合に於ては恐らく全然無意識の狀態が存する。之はちやうど氣絕の場合と同樣である。併しながら睡眠を來さしむる所の中樞の官能の一般的中止といふものは更に副貳的に幾多の現象を發生せしむるのである。さうして此の結果として全然無意識な狀態は去つて、此の代りに一種特異に變化された意識狀態が來るのである。此のやうに變化されあつて殊に睡眠が左程深くない時に於て發生する所の意識狀態は夢といふものである。

備考、睡眠の來る時や又は睡眠間に於て腦髓殊にそれに於ける充血から來る所の現象に關しては屢研究も試みらるれば又議論もされた。第一に伊太利亞の「モッソー」が腕に於ける血量變化測定器を使用して結論した所によると、睡眠中には末端器官の容積といふものは增加し、さうして血液がそちらの方に分配されるから腦髓の容積は減ずる。

又「ドンデルス」が動物の頭蓋骨に對して圓鋸術を施し、かくて睡眠の來る時には小動脈が收縮するのを發見してから以來、暫時の間は腦髓の貧血といふものは睡眠に必ず伴ふ現象であるといふやうに假定されて居つた。されど幾くもなくして一部分は動物に於ける實驗を基礎とし一部分は頭蓋骨上に圓鋸術を施された人に於ける觀察を基礎としてこれに反對の現象が發見されるとの聲が高くなつて來た。又其の後になつて「モッソー」その人並に他の觀察者により確定された所によると、腦髓の容積並に末端の身體の部分例へば腕の容積の增減は全然無關係なものであつて、卽ち各場所に於て直接の血管運動の神經活動により增減がなされる計りであるといふ事である。一體腦髓の容積の特性ともいふべきものは其れが大なる變化をなす性質を以て居るといふ事である。之によつて圓鋸術上の直接の實驗が示すやうに、腦髓の容積の昇降線は腕に於けるそれよりもより多くの變動を示すのである。最後に又睡眠中には腦髓に於て幾分充血の狀態が存するといふ事は瞳孔が常に狹縮されるといふ觀察と一致するのである。されど「クスマウル」や「テンナー」の實驗に基けば腦髓に迄血液の流入が沮害されるといふ事は瞳孔の著るしい擴大を來すといふ事である。

覺醒閾を確定するには通常音響刺激卽ち落下球を用ふる。「クレペリン」の指導の下に「ミヘルソン」によつて行はれた實驗に於ては、妨害的影響といふものは注意して可能的に除却され、當該睡眠者は實驗者と聯絡を斷たれ、さうして實驗は數ヶ月間に涉つて施されるから彼れ睡眠者は通常のやうに寢に就き、何時の夜に實驗が施されるかなどの事は少しも知らずに居つた。正常の睡眠に於ける覺醒閾の變動を具體的に示す所の昇降線は、「ミヘルソン」の實驗に基けば、寢入つた後三十分に至る迄は甚だ低い。されど此後急激に上り、さうして四十五分になると其の最高に達する。併し此の狀態に於てはたゞ三十分間止まり。さうして此後先づ急激に下り、次に徐々に下り、かくて二三

の動搖の後は横線（アブシス）に達する。「コヘルシユッター」が發見し「ミヘルソン」がそれを確定したやうに、一度目が醒めて再び寢入つた後には少時間の深い睡眠が來る。されど此のやうな變化は刺激閾の高上として認める事は出來ぬ。何となれば覺醒刺激といふものは刺激閾のその他のものとは性質を同うしないからである。その證據には何等の覺醒を來さない所の刺激と雖も知覺されたり統覺されたりしてかくて一部分此の刺激が錯覺的に構成されて夢の分子となり、又一部分は覺醒閾の下に位する刺激は呼吸並に脈搏の上に影響を及ぼすに至るからである。

第二、夢の中に於ける意識の變化

夢の中に於ては諸種の表象は再現せられ一寸した覺官的印象はとんでもないものに同化誤認せられ、統覺作用といふものも行はれ、かくて意識官能は再び起されたやうに見える。併し夢の中に於ける此の意識といふものは二樣の點に於て通常の意識と異つて居る。第一には想ひ出した所の回憶表象は幻覺的性質を帶びて居、さうして外界の印象の知覺といふものは正常な覺官的知覺ではなく、之に反し錯覺的知覺である。第二には統覺作用は變つて居る。從つて意識の內容を判斷するの作用は本質的に變化されてあるやうに見える。

夢の中に於ける幻像の多數は固有の意義に於ける幻覺ではない。然らば何であるかといふに之は睡眠中に決して盡きる事のない覺官的印象から來る所の錯覺である。例へば睡眠者の不便宜な位置は忽ち錯覺を起さしめて、骨の折れる仕事や相撲や危險な登山の表象を起さしめるのである。肋骨の間に於ける輕い痛みは追ふ所の敵に刺されたやうな心持をさせ、或は進みくる所の犬に嚙まれたやうな念を起さしめる。呼吸が劇しく切迫すると、寢衣で甚だしく壓迫されるやうなひどい苦痛となる。又此の寢衣其のものは胸の上に轉がされる所の荷物と思はれる事もあるし、或は自己を壓迫しやうと脅かす所の大なる怪物の樣にも見える。體をば極めて僅か動かすといふ事は幻像的表象を生

せしめ千差萬別の思をなさしめる。例へば睡眠者の足を不隨意に少し廣げると、目の眩むやうな高い塔の上から落下するやうに思はしむるし、又己れ自らの呼吸運動の韻律をば飛揚運動と感じたりするやうなものである。其の外夢の幻像中に於ては、幾多の主觀的の視覺や聽覺が甚だ重大な影響を及ぼすのである。此等の感覺たるや覺醒狀態に於ては暗い視界の微光線や耳の響や耳の鳴り等として知られる所のものである。その中でも特に主觀的網膜興奮といふものは有力なものである。此のやうな理由からして夢に顯著な特性が存する理も發見されるのである。その特性とは類似若くは全然同一である物體の多數を眼前に見るといふ事である。卽ち無數の鳥や蝶や魚や燦爛たる眞珠や花などが吾人の眼前に散亂されて見えるのである。此の際暗い視界の微光線は奇怪な形態を取得し、さうして此の微光線を構成する所の多數の光點は、夢に由つてちやうど夫れ丈多くの個體表象に具體化せられ、こは又微光線の可動性の爲めに動いて居る物體のやうに感せられるのである。さらに又これにより夢の一大傾向卽ち主觀的の光線に基く所の異種雜多の動物の形を見るといふ事も淵源し來るのである。此の場合に於ては當該夢者の他の狀態も相應の影響を及ぼすのである。他の狀態とは皮膚感覺とか一般感覺とかから來るものである。例へば主觀的の光線刺激にして一般感覺が高まつたが爲めに翱翔する鳥とか爛熟たる花とかを見て居る時に於て、若しも之に不愉快な皮膚感覺でも加はるならばこれ等は忽ち醜い毛蟲や甲蟲に變じ、それが睡眠者の手を銜うて上るといふやうに思はしむるのである。或は又余が觀察したやうに、此のやうな睡眠者は蟹に逢ひその剪刀を以て凡ての指の關節を挾まれたやうな夢を見、さうして覺醒すると指が不具のやうに曲つて居るのを發見するのである。此の際には關節に於ける壓覺が視覺的表象を變形せしめたのである。

以上の場合に於ては一部分は客觀的であつて一部分は主觀的である所の感覺的興奮が直に幻像に

迄變化されたのであるが、尙此の外に次のやうな場合もある。その場合に於ては印象が先第一にそれと關連する所の身體狀態の茫漠たる表象を喚起し、次に此の狀態に直接に關連したり又は單一な聯想によつてそのものと結合する所の幻像を發生せしむるのである。此の如くにあるから「シエルナー」は注意して云ふのに、水が一大作用をなすといふやうな多くの夢の主なる原因は、睡眠者の尿の切迫した時である。此のやうな睡眠者は多く井の夢を見るのである。又時によると橋から河の中に迄見下しさうして甚だ近くある所の聯想の爲めに、無數の豕の膀胱が河中のあちらこちらに動いて居るを見るのである。之に於てはおほかた目の主觀的微光線が此種の特殊なる表象を構成せしめたのであつて、又他の場合に於ては此の微光線は川の表象によつて興奮されて無數の澁測たる魚に迄變せられるのである。此の如き成行きからして魚といふものは單に一個ではなく多數に於て多くの人の夢の成分と屢なるのである。

又之と同樣に夢の表象といふものは實際の飢や渴の感覺に關連したりし、又は餘りに結構な夕飯を飽食して苦しいから喚起される事もある。例へば渴した睡眠者は宴會に出席したやうな心持を起し、空腹なものは己れ自ら食するか若くは他のものが食事をするのを見る。又單に食ひ過ぎた睡眠者も同じ目に逢ふのである。彼れは時とすると飲食の器具が澤山自己の前に排列されるのを見る。此のやうな狀態に對し若しも眩暈とか、嘔氣とか加はるならば、彼れは忽ちにして高い塔の上に登り、それからしてめまひのするやうな深い谷底に落ちるやうな心持をするのである。

最後に此の種の夢の中には世に屢起る所の轉置夢といふものが屬する。これに於ては當該夢者は最も粗末な身仕度で市街や宴會に出かけるのである。此のやうな夢の眞正の原因は通常懸蒲團が落ちたといふ事である。若しも蓐中に於て蓐の外にでも出やうとして居るならば、該夢者は甚だ危險な位置に臨ませられた樣な心持をするのである或

は又此のやうな時には甚だ高い壁を昇降したり若くは一の深い淵を見下したりするのである。又或ものを搜索して發見の出來なかつた夢や、出發に際して何かを忘れたといふ樣な夢は一般感覺といふものがどことなく攪亂されたに出るのである。その外心持のよくない位置や些少の呼吸の切迫や心臟の鼓動なども此のやうな表象を喚起せしむるのである。此の表象と感覺的印象との關係は覺官的感情によりて媒介されるのであつて、此の感情はそれが甚だ多種類であるが爲めに、甚だ異なつて居る種類の聯想を生せしむるのである。併しての感情の調子といふものは常に同一に留まり居るのである。此の如くあるから此等の場合に於ては表象の一般的方向は感覺によつて確定され、其の特殊の內容は他の源泉から出づるのである。他の源泉とは一部分は復現作用であつて一部分は他の覺官的印象其ものである。

最後に觸覺や一般感覺から發生する所の夢に於ては、主として夢に固有であるが又之と同樣に高度の精神的混亂の場合に於ても起る所の現象が發見されるのである。その現象とは一般感覺が客觀化されるといふ事であつて、卽ち當該者は自己の身體上の心持をば奇怪なる形に構成して之を他の人間とか又は物體とかに移植するのである。此の際此等の外界的表象は覺醒生活の印象を自由に復現するか又は直接な覺官的印象から發生されるのである。此の種の客觀化の場合は吾人は水に關する夢、飲食に關する夢に於て知得するのであつて、この飲食の夢は未知の交際界に出でるやうに思はしむるのである。又呼吸の響をば飛躍運動と解する場合に於ても夢者は表象をば往々自己以外に發生せしむるのである。卽ち之を天使が下ると思つたり、或は微光線をば飛ぶ所の鳥と解するが如きである。その他輕い嘔氣は自己に復讐をなす所の妖怪とか醜惡な動物の表象に迄客觀化される。更に夢者にして若しも切齒でもするならば顎から長い恐ろしい齒が生へて居る所の鬼面を見るのである。

覺官的刺激によつて喚起された表象に對しては一部分は直接の同化作用により、一部分は繼續的の聯想作用により種々の方法に於て回憶表象が結合さるゝのである。過ぎ去つた日の經驗特に深い印象を喚起したとか又は強い感情と結合されたとかいふものは吾人の夢の最も普通な成分を構成するのである。最近に死んだ親戚とか朋友とかは、死去の事實や葬式の爲に喚起された深い印象の爲に、甚だ屢夢に現はれるのである。此等の理由からして、總て死者は夜になると生存して居る人と交際を續けるといふ迷言が一般に流布するに至つたのである。或は又日常生活の他の事件も多少の潤色を加へて反復される事もあるし、若くは緊張を以て望まれて居る所の事件も實現されたと思ふのである。此の際に於て夢が通常の現實的思想と異なるに至るのはどういふ譯であるかといふに、一部分は聯想から來るのである。此の聯想は各個の表象に結合する事が出來るし、さうして覺醒生活に於ては起らないのに睡眠中に於ては直に形態を取得するのである。又一部分は覺官的興奮から來るのである。此の覺官的興奮は前に述べたやうな方法に於て絶えず幻覺的表象に迄構成せられ、さうして復現其ものに方向を與へると同樣に、表象の經過中を横斷しかくて新奇な復現を起さしむるのである。此の外に夢の中に於て反復される所の新しい印象は聯想によつて以前の經驗を喚起する事がある、例へば學生が試驗を受けた最後の日に於ては、夢に自己は教場の腰掛の上に坐して試驗の用意の不十分であつたが爲に四苦八苦すると思ふが如きである。此のやうに特殊な傾向を生せしむる最近の原因としては通常當該夢者の不便宜な位置とか呼吸の切迫とかである。吾人に最も遠かつた經驗即ち兒童時代の光景が夢に顯はれるのは之は聯想によるのであつて、その聯想される所の諸種の表象は注意深い觀察者には決して見逃されない所のものである。

夢の表象は更に又運動の中樞部を同時に興奮せしむる事がある。此の種の運動中で最も頻繁に起

るものは言語運動であつて、稀には腕や手の身振的運動である。されど病的に近いやうな狀態に陷つた時のみに於て夢は複雜な行爲を實行するのである。此の場合に於ては夢からして睡遊（ナハトワンデルン）といふ行爲が發生するのである。睡遊の際に於てはその行爲が最も判明に夢の表象が幻覺的性質を帶びるに至つたといふ事を示すのである。例へば睡遊者は窓をば戸と思ふからそこから外に出たり又は暖爐をば攻擊し來る所の敵と認めてそれを投倒したりするのである、或は又日常從事して居る作業は表象に於けると同樣に、行爲に於ても稍規則正しい方法に於て繼續されるのであつて、從つて睡遊をなす所の下男は長靴を磨いたり、又それが學生であるならば始めた問題をば終りまで書くのである。されど又他方からいふと此の種の事に關する世人の報告は極めて注意して受取らねばならぬ。夢に於ては通常行爲は目的に合ふやうな事はなくて過つ事が甚だ多いが、之は夢の性質の然らしむる所である。そは何故であるかといふに、敢て個々の表象が性質に於て奇怪であるに由る許りでなく、又その全體の連絡の仕方も奇怪であるに由るのである。此の連絡の仕方といふものは覺醒生活に於ては規則正しく經過するのであるが、夢中に於ては最も多く飛んだり又は無方案に排列されたりするのであつて、從つて兩者の間には大なる相違があるのである。此の區別のある理由は既に述べて置いた。即ち顯はれ來る所の印象や聯想をば直に幻覺的に變形するといふのは夢の性質であるからである。此等の理由から夢に於ては無連絡といふ狀態が存するのであつて又此狀態の爲めに多くの夢が常に吾人に記憶せられないのである。又夢の事でも吾人が覺えて居て回憶する事の出來るものもある。此の種の夢は秩序の正しいものであるが、併しその中に顯はれる形象や光景抔は常に奇怪な形を呈するのである。さらに又夢中に於ては回憶する事とか斷定するとかの作用は缺損するやうになる。吾人は夢中に於てはあらゆる言語をば可能的流暢に使用するが目

が醒めて見ると之を覺えて居る事は極めて僅少である。それから覺醒するに際し耳の中に於て最終の句が響くならば吾人はそれが全然無意義であるのを發見する。或は又吾人は夢の中に於て至貴至重な科學的發見をなしそれに就き滔々一場の演說をなすが、後に覺醒して見るとそれが亦不成立のものであるを知るのである。斷定の此の種の缺損は時とすると覺醒後迄引續き、さうして赫々たる日光が生ずる頃に及んで先の立派な意見も實は三文の價値のないものであつたのを發見するのである。此の種の無意義な事を考へるといふ事と次のやうな現象も類似するのである。それは一人自らの感情や感覺を客觀化したりし、二には何等かの聯想を相互間に有する所の人物をして相互に交際せしめたりし、三には吾人自身の人格が吾人に對立する所の他のものゝやうに見えるといふ事である。此の如くであるから、夢の中に於ける表象の結合作用は其の各個の表象と同樣に幻覺的性質を帶びるのである。吾人は睡眠をなしつゝある間は欺瞞昏迷の目的物となり、それに翻弄せられるものである。吾人は吾人の夢の中にある形象が覺醒生活の時の形象と如何に異なるかを決して疑はない。或は又無意識的の回憶作用も夢の中に於ては起らないし、よし又起つたにせよそは極めて稀に起るのである。さうして若しも此のやうな狀態が來たならばそれは通常覺醒の瞬間が來つたといふ事を意味するのである。

（未完）

ヘーゲルの國家觀

村田岩次郎

本誌第四卷第貳號に登載せる「十八世紀の國家覽と其反動」の續稿なり

個人主義的思潮と其反動的傾向とのシンセシスはヘーゲルの法律哲學であつた、彼が從來の國家學說に反對したる點は國家を以て人工的或は專擅的のものとなし、之を單純なる手段方便と見做したるにあり、併し個人本位であり、從つて國家を器

械視したる從來の國法學者の、所謂必要國家、理性國家は、彼の又能く解した所である。かくして公民社會は全然從屬の關係に置かれ、個人の生存幸福、竝に其の法律上の存在は、社會全體の存在幸福竝に權利と混淆せられ、然も獨り此關係に於てのみ實現せられ又保障せらるゝのである。

カントに於けるが如くヘーゲルに取りても、亦國家は（法律によつて自由意思の認めらるゝ範圍に於て）法律國家である、併しヘーゲルがカントと大に趣を異にしたる點は自由意思の合理性總意思の觀念に就いて極めて眞面目であつたことである而して彼に據れば、自由意思は獨り家族に始まり國家に終る所の全倫理界（Der ganzen sittlichen Welt）に在りてのみ實現せらるゝのである。されば、ヘーゲルに取りては國家は偶生物にあらずして必然の成果たり、國家は理性夫れ自體にして又道德夫れ自身である、國家は隨意の作物にあらずして倫理思想其のものゝ發顯である國家は倫理的完全世界にして又地上の上帝である。

彼はアダムミユラーと等しく國家を說明して絕對不易の目的自體なりと云ひしも、ルツソーに對しては非難攻擊の矢を放つた。卽ちルツソーに據れば總意思は唯各個人の意思の總加たるに止まり又社會契約は自由意思の上に築かれ從つて中心となる可き權威がないと云つた。又ハツラーに向つては、國家の合理性を重視し、國家の權力は決して專擅的のものにあらずして、理性夫れ自體の發現であることを說いたのである。

國家は道德によつて其の直接の存在を有し、個人の意識によつて其の間接の存在を有するのである國家に在りて自由は其最高の權利を示し、國家は個人に對して此至高の權を行ふが故に、個人最高の義務は從つて國家の一員となり國家に一身を貢獻するにあり。されどヘーゲルは決してアダムミユラ一流のローマンチカーの國家觀を抱けるにあらずして、クラツシックの思想觀念を抱いて居つたのである。故に彼は啓蒙の思想に反對すると共に又ローマンチークの主觀的專制に抵抗した。而